

来賓挨拶

特許庁長官
中嶋 誠



本日はお招きいただきありがとうございます。今日は現役の方もOBの方もいらっしゃいますが、まずはお礼を申し上げたいと思います。現役の方々には日々、特許庁全体のこの難況の中で仕事に専念していただいていますし、OBの方々、あるいは関係機関の方々にはかねてより応援していただいております。我々現役はご期待にそえるよう、さらに頑張らなければいけないと思っております。

先日、何人かの方と長官室で意見交換をさせていただきましたときに、特実、任期付審査官、意匠、商標と、4つのグループで行ったのですが、大変感銘を受けました。というのは、第一線で活躍されている審査官の方々が大変真摯に仕事に取り組んでいらして、いろいろな悩みも抱えながらやっていらっしゃるということが実感をもってわかり、ある意味で非常に嬉しい思いをいたしました。それだけみなさまが真剣に取り組んでくださっているということです。

ただ、やはりいま特許庁は大変な状況にあると言えます。21世紀になって、ユーザーの方からすると、究極的には世界中の制度が同じようになり、審査や審判の運用もだいたい同じになり、さらにもっと言えば、日本の特許庁で審査をして権利になれば、それが世界でも通用するというのが理想ですし、その要求はますます高くなってくると思います。そうすると我々はその要求に応えなければならない。一方で、日々の審査をやりながら、他方でハーモナイズのための国際的な仕事もしなければならない。いまは、そういう意味でも非常に大変な時期だと思えます。

それに加えて、いま日本の国内事情というのは、公務員制度全般の厳しい見直しなどがあり、公務員の仕事に対して風当たりがきついという面もあります。そうした中で、とにかく知恵を出そうということで、サ

ーチのアウトソースや外国の特許庁との協力などを行っているわけですが、やはり最終的に何をするにも組織というのは人だと思っています。そういう意味で、先日、意見交換をさせていただいたら、みなさんが非常に前向きに仕事に取り組んでいらっしゃるということで私自身も感銘を覚えたわけです。

みなさんと今日、決意を新たにしたいのは、とにかく日本の特許庁を21世紀世界でいちばん強い特許庁にしていこうということです。別に特許庁同士けんかをしているわけではないんですが、「強い」というのは、「質のいい」特許を日本の特許庁から世界に向けてどんどん発信していこうということです。質がよく、かつ少しでも迅速にということです。

この間ひとつだけ驚いたのは、長官室の懇談のときにどなたかが「いま審査の待ち時間は26ヶ月ですが、それがいずれ11ヶ月になって最終的に待ち時間がゼロになってしまうと、私たちの仕事はどうなっちゃうんでしょうか」と心配そうな顔をされたんですね。私は「いやー、そこまで先々心配していただく必要はないんじゃないでしょうか」と言ったんですが、幸いなことに特許庁の仕事は質、量ともいくらでもあり、かつそれをこなしていくと必ず世の中に見える形で貢献できるものですから、そういう意味で非常にやりがいがあると思います。

たしかに大変な時期ではありますが、そこは我々の実績で、社会、あるいは世界に向かって胸を張って示していくしかありません。ぜひこれからも現役、OBともに一致団結して、仕事に取り組んでいきたいと思えます。これからも21世紀の世界の特許庁モデルをつくる意気込みで頑張っていきたいと思えますので、どうぞみなさまよろしく願いいたします。本日はありがとうございました。